

## 《大企研エッセイ自選集1》

「窓外の風景・早朝の散歩」 平田政和（元・東レ株式会社法務部長、当研究会OB）

### 【25冊のアルバム】

私は写真を撮るのが好きだ。よい写真が撮ればそれはそれでうれしいが、そうでなくても自分で何かを発見し、シャッターを押す、そのこと自体に喜びを感じている。庭にジキタリスの花が咲き始めたのを見つけると出勤前にカメラを取り出し、日曜日の朝に庭に出て星スミレの可憐な花が咲いたと知ると、コーヒーカップを傍らの鉢に預け、カメラを向ける、といった具合である。

海外出張があれば、英和辞書や自分で作ったグロッサリーとともに薄さで選んだコンパクトカメラが必ず鞆の中に入っている。

我が家の書庫には、「窓外の風景・早朝の散歩」と表題をつけた25冊のアルバムがある。スタートは1981年4月のマニラ・マンダリンホテルの窓外の風景で、この写真を皮切りに以後の海外出張の際に撮った多くの写真が貼られている。

私はサラリーマンとしての40年間、企業法務に携わってきた。仕事の関係で数多くの海外出張をしたが、その折々に撮った写真が貼られている。

商品の販売活動や販売促進業務に携わっている多くの出張者とは異なり、仕事の性質上私の行動範囲は、ホテル・法律事務所・役所・交渉相手方本社と夕食時のレストランに限られている。子会社の法律問題を解決するための出張の場合は、これに子会社の本社と工場が加わり、工場用地の買収の場合は現在農作物が生育されていたり村そのものであったりする工業団地の予定地が加わる程度である。

およそ写真を撮りたくないような対象がない行動範囲と日曜日に出発し土曜日に帰着するというスケジュールの出張の中で、25冊ものアルバムがあるのには私自身も驚いている。

### 【窓外の風景】

わざわざ「重い」、といってもたかだか200グラム程度だが、カメラを持っていったにも拘わらず、ホテルの部屋の窓から見える景色だけを撮って帰った出張も何度かある。

韓国・ソウルのウエスティン・チョウスンホテルには何回も泊ったが、ビルに取り囲まれた庭のいかにも韓国らしい塔を上から眺めた写真1枚だけが貼られている出張もあった。「テキサスと東京の間はハワイである」とハワイで行ったテキサスの石油会社との合弁契約交渉では、ハイアット・リージェンシーからのワイキキの浜の夜景だけが、またロサンゼルスベンチャー企業とのベバリーヒルズでの技術ライセンス交渉では、ベバリーヒルトンの、緑の人工芝が敷かれ白いテーブルと椅子が置かれた、いかにも気持ちよさそうなプールサイドの写真だけが残っている。

いずれも観光旅行なら楽しい場所だが、仕事となると話は別である。ハワイでの契約交渉では、地下の会議室で午前中びっしりと交渉をした後、昼食に外へ出たときには、ワイキキの浜の陽の光で目がチカチカしたのを覚えている。

インドネシアのジャカルタの窓外の風景は、私が最も好きな景色の一つである。アルバムにはマンダリンホテルの23階からのパノラマ写真が貼られている。樹木の豊かな緑とレンガ色の屋根のコントラストがすばらしく、遠くに点在しているビルもこの風景の邪魔にはなっていない。

これに比べるとニューヨークやロサンゼルスのホテルの窓外の風景はビルばかりで何の変哲もない。もっともこれは私の泊まったホテルの格によるのであろう。

### 【モノリッテン】

海外出張での一番の難物は「時差」である。早朝というには未だ早い時刻に目が覚める。十分に寝足りたように頭はすっきりとしている。寝なければいけない、と必死で思うのだが、目はパッチリ、頭はスッキリ、という状態なので、仕方なく起きることになる。契約交渉の初めの頃は、その日の交渉内容を確認したり、契約書案文のチェックをしたりするのだが、することがなくなると夜明けを待って、カメラ持参で散歩に出かける。もっとも治安についての確認が最優先である。少しでも問題がありそうな場合は、散歩を避けるか、走ってホテルまで帰れる距離にする。

今でもなつかしく思い出すのが、オスロのフログネル公園のグスタフ・ヴィーゲランの彫刻だ。フロントの若い男性のサジェッションに従い、タクシーではなく始発の市電に乗って出かけた。フログネル公園というのは、ヴィーゲランの彫刻を展示する為に特別に作られた広大な公園だが、これでもか、これでもかという位多くの彼の作品が展示されている。

公園の中央にはモノリッテンといわれる老若男女121体の人間が刻み込まれた高さ46フィート（約14メートル）の塔がある。人の上に人が重なりちょっと異様な感じがする。正直なところ余り感心すべき作品とは思われない。人間の一生を表現したという噴水もあった。小さな川にかかっている橋の欄干には58のブロンズ彫刻が飾られていたが、その中の父親と息子が暖かい雰囲気話し合っている像を見たときには、家族と離れて私の母と大阪で暮らしている中学生の長男を思い出し、ちょっと感傷的になった。

多分アメリカ人だと思われる中年の夫婦も散歩に来ていた。「写真を撮りましょうか?」。モノリッテンを背景に奥さんがご主人にそっと寄り添う姿は映画の一場面のようにであった。

数年後、契約更新交渉のため来日した相手方の顧問弁護士と食事を一緒にしたときのこと。ノルウェーの代表的な彫刻家の作品ということで、このモノリッテンを話題にした。弁護士の反応はただ一言「アグリー」というものであった。自らの目・考え方で物事を判断することのできる人としての発言であった。

### 【シャーロック・ホームズの喫茶店】

イギリスの会社からその会社の発祥となった由緒ある繊維事業部門を買収する交渉も終わり、明日は帰国という夜のことである。少しお酒の入った頭でガイドブックの地図を眺めていると、ベーカー・ストリートという街路が目についた。私はシャーロック・ホームズではないが、コナン・ドイルのホームズ物は延原謙さんの訳で全部読んでおり、気に入ったホームズの発言は記憶している程度の愛好家ではある。

調べてみると、ホテルからは2～3キロメートル程であると分かった。30分も歩けば行ける距離じゃないか。明朝の集合時刻は9時だ。「行かざあなるめえ」と独り言をいながらガイドブックを丁寧に読み、場所の見当をつけた。シャーロック・ホームズの下宿はロンドンのベーカー街221番地Bであり、その番地には今は銀行の事務所があること、今でも来るシャーロック・ホームズ宛の手紙には銀行の担当者が返事を書いていること等は知っている。住所まで行って見ると、ロンドンに多く見られる普通のビルで、入り口に221b Baker Street という番地とパイプを銜えたホームズの横顔を刻印したプレートが張ってある。うれしくなって、そのプレート

の写真撮ったことは言うまでもない。

ホテルに帰ろうと思い、何気なく向かいの喫茶店を見ると、入り口に何か書いてある。“Sherlock Holmes must have enjoyed our coffee.”（シャーロック・ホームズも当店でコーヒーを飲んだに違いありません。）と読めるではないか。私はまたまたうれしくなった。店が開いておれば、ホームズに習って私もコーヒーを飲んだだろうが、残念ながら店は閉まっていた。

#### 【ブーゲンビレアの浮かぶプール】

バンコクの朝は、散歩ではなくプールからスタートする。タイと日本の時差は2時間だから、日本時間の8時に目が覚めても現地時間では6時である。普段は目が覚めるとすぐにシャワーを浴びるのだが、バンコクでは、まずスイミング・パンツとその上にショートパンツをはき、Tシャツを着て、ゴム草履でホテルの3階部分の屋上にあるプールへ向かう。この時間は、従業員がプラスチック製のデッキチェアをプールサイドに並べたり、ビーチパラソルを広げたりしているだけで、プールには誰もいない。

東南アジアへの出張の折には飲み水には常に気をつけている。歯を磨くにもミネラルウォーターを使っている。それにも拘わらず泳いでいる間にうっかりと飲むプールの水は気にしない、というのはちょっと理屈には合わない。問題が起こったこともないので「まあいいか」というのが正直なところである。

従業員に「トーストと紅茶」と朝食を注文してから、一人のんびりとプールで泳ぐ。昨夜の間に落ちたのか、水面には真っ赤なブーゲンビレアの花がいくつも浮かんでいる。花の間を何も考えずにゆっくりと泳いでいると、疲れと昨夜のお酒がどこかへ消えていくようである。しばらく泳いでいると、ホテルのレストランから焼き立てのトーストとたっぷりと紅茶が入ったティーポットとジャムやマーマレードの小壘が乗ったトレーが到着する。

このホテル、今は経営が変わり名前も変わったようだが、リージェント・オブ・バンコクの紅茶は絶品だった。その絶品の紅茶を飲みながら、焼き立てのトーストを食べる。周りには真っ赤なブーゲンビレアの花が咲いている。朝の太陽は余り暑くなくプールで冷えた体には気持ちよく感じられ、さあ今日も頑張るぞ、と元気が湧いてくる。ゆっくりと朝食を食べ、部屋に戻ってシャワーを浴びると、8時頃になる。これから仕事が始まるのだ。

この気持ちのいい朝の写真は1枚もない。写真を撮るのを忘れるほど、いい気持ちを楽しんだのだろう。

2006年8月1日掲載